

【論文】

近代社会における個人と性別

佐藤 麻衣 (淑徳大学大学院)

1. はじめに

ジェンダーに関わる諸現象は、われわれにさまざまな「生きづらさ」を与えている。これまでのフェミニズムおよび諸ジェンダー研究は、そうした「生きづらさ」の解消に向けられており、じっさいに数多くの効果を上げてきた。そのことはどれだけ高く評価してもし過ぎることではない。しかしながら、そうした諸研究の中には、日常的な実感とそぐわないものも多くある。近年指摘されている若者のフェミニズム離れや、バックラッシュの原因の1つには、人びとの実感とのそうしたそぐわなさがあるのではないだろうか。つまり、ジェンダー研究の多くは、ジェンダー・センシティブであるがゆえに、ジェンダーを必要以上に重く捉えすぎているという側面を否定しきれないのではないだろうか。

本稿では、ニクラス・ルーマンの社会システム理論を指針とすることで、近代社会における性別の重要性を再検討することを試みる。具体的には、近代社会という社会はいかなる社会なのか、そうした社会に生きる個人とはいかなる個人なのかという事柄について考察することをとおして、近代社会における性別の意義を相対化することを試みる。

ルーマンの社会システム理論は、これまでたびたび、性別の意義を軽視しすぎていると批判されてきた。しかしながら、私見では、ルーマンのシステム理論はむしろ、「中立的」なのである。つまり、性別の意義を過大評価することがない代わりに、過小評価することもない。したがって、ルーマンのシステム理論は、近代社会における性別が、どこでどのように重要であってどこでそうではないのかという問いに、十分な答えを提供しえるであろう。

2. 機能分化社会における個人性の増大とパースンの必要性の増大

(1) 成層分化社会における個人と機能分化社会における個人

ルーマンによれば、近代社会は、成層分化した社会からの脱却として捉えられる。成層分化した社会とは、身分によって階層化された社会である。そうした社会は、自らを階層化することによって、ヒエラルヒー的な秩序を維持している。したがって、成層分化社会における個人は、その身分の上下にしたがって、社会の中のある特定の階層へと位置づけられており、異なる身分へ接近したり、異なる階層へ移動したりすることはきわめて困難であった。

成層分化社会における身分は、よく知られているとおり、出自とほぼ自動的に結びついていてきた。それゆえ、成層分化した社会における個人は、家族をとおして社会の中に位置づけられることになり、別様に言えば、家族をとおして社会に「包摂」されることになる。ある家族に所属しているということが、すなわち、社会の成員として認められるためのほとんど唯一の手段であり、社会生活を送るための必要要件であった。逆に言えば、個人が家族から離れて生活していくことはほとんど不可能であった——「家族の外部での生活は

ほとんど考えられなかった。そもそも家族の外部で生活をしたとしても、それは、不幸なもので、リスクに満ち、短期間だけのものであった」(Luhmann 1989:166)。

しかしながら、近代社会への移行とともに、家族のもつ意味合いは次第に変化していき、家族が個人を拘束する度合いは減少していくことになる。

ルーマンは近代社会を機能分化した社会として捉えている。機能分化した社会では、(階層化によって境界を引かれている成層分化社会とは違って)社会的な機能によってその境界が引かれている。詳しくいえば、機能分化した社会では、経済や法、政治、教育、宗教、芸術といった各々のサブシステム(=機能システム)が、相互に依存しあいながらも、互いに独立した、自律したシステムとして見出される。それゆえ、機能分化した社会では、いずれの機能システムも他の機能システムを代替することはできず、いずれの機能システムも他の機能システムを一方向的にコントロールしたり、支配したりすることはできない。と同時に、それぞれの機能システムをまとめあげるような全体的なシステムというものもまた、見出されない。

こうした社会においてはもはや、家族は「それ以外の多数のシステム領域とならぶ一つのシステム領域にすぎな」くなっており(Luhmann 1989:170)、「個々人を社会のなかにしっかりと位置づけることはもはやできな」くなっている(Luhmann 1989:169)。というのも、個人がその人生を生き抜いていくためには、経済(例えば、何かを買うこと)や法(例えば、自らの権利が守られること)、政治(例えば、選挙に参加すること)、教育(例えば、職業訓練を受けること)といった、複数の機能システムへ関与することがどうしても必要になってくるのであり、近代社会における家族はもはや、個人がそうした各機能システムへと参加することを確実に保証することはなくなっているからである。

したがって、そうした社会における個人は、ある家族に所属しているということだけではその生活を成り立たせることはできなくなっており、自らの必要に応じて、多数の機能システムと関わり合いながら生活していかなければならなくなる——「機能的分化がみられると、個々人は社会のたったひとつの社会システムにだけ定住することはもはやできず、社会のどこか特定の場所に縛りつけられないことを前提としなければならない」(Luhmann 1982=2005:15)。

つまり、成層分化社会における個人が、つねにたったひとつのサブシステムにのみ包摂されており、それぞれのサブシステム間を移動することはきわめて困難であったのに対し、機能分化社会における個人は、特定のサブシステムに継続的に包摂されることはない代わりに、自らの必要に応じて、さまざまなサブシステムに一時的に包摂され続けることで、その生活を成り立たせているのである。

(2) 近代社会における個人の「個人性」の出来

確認すると、成層分化社会における個人は多くのばあい、家族を通じて、生涯、たったひとつのサブシステムにのみ包摂され続ける。一方で、機能分化社会における個人は、自らの必要に応じて、さまざまなサブシステムに一時的に包摂され続けている。この異なる「包摂」のありようによって、成層分化社会における個人と機能分化社会における個人の間には、どのような差異が出てくるのであろうか。

まず、成層分化社会においては、個人は家族を介することで、その社会の成員資格を手

に入れることができた。言い換えれば、家族を介することで、個人は初めて、社会と関係し合うことができたのである。ここで言われる「社会と関係し合う」とは、すなわち、社会に「包摂」されるということを目指しており、社会によってなんらかの期待を割り当てられるということの意味している。そうした意味では、成層分化社会における家族は、社会が個人へ向ける諸期待を整序したり制限したりするはたらきをもっていたと言えるであろう。

しかしながら先に述べたとおり、機能分化社会になると、家族が個人を拘束する度合いは格段に減少しており、成層分化社会における家族のように、個人の生活を保証したり、個人の包摂のありようを規定するような、いかなるシステムも見受けられない。したがって個人は、どのシステムにどのように関係するのかを、自らの選択によって決定せざるをえなくなる。それは同時に、成層分化社会においては家族に任されていた、社会からの諸期待の整序もまた、その個人自らで行わなければならなくなってくることをあらわしている。

したがって、成層分化社会から機能分化社会への移行の帰結として、個人の「個人性 (Individualität)」（Luhmann 1989）が出来する。つまり、社会的な諸期待をどのように整序するのが個人に任されるようになると、それぞれの個人間で差異が出てくることになる。そうすることで、機能分化した社会における個人は、他者とは明確に異なる個人として、その「個人性」を獲得していくこととなるのである。

ただしここで、以下の点に留意する必要がある。すなわち、ここで言われる「個人性の獲得」はネガティブな意味合いで使われているわけではもちろんないが、決してポジティブな意味合いで使われているわけでもない。ここで言われる個人性は、「個性の発揮」や「自己実現」のように、個人の主観的な意図によって獲得されるものではなく、前述したとおり、成層分化社会から機能分化社会への移行の帰結として、社会からの要請によって獲得されたものとして捉えられている。換言すれば、個人に関わるあらゆる事柄を（その家族ではなく）個人自身に帰属せよという社会からの要求が、個人の個人性を生み出したと言ってよい。

（3）個人性とキャリア

ここまで、機能分化社会になると、家族が個人を拘束する度合いは格段に減少しており、個人は自らの必要に応じて、各機能システムへと関わっていく必要があると述べてきた。しかしながら、そうは言っても、われわれは経験上、やはり未だに、家族が個人の接近できる出来事を限定してしまうようなばあいが少なからずあることを「知って」いる——たとえば家族の経済状況が個人の学歴を規定するようなばあいが挙げられる。あるいは、家族に帰属されるような事柄ではないが、ある事柄が自らの接近できる事柄を規定してしまうことがままあることを「知って」いる——例えば、自らが所属していた学部が就職できる職業を限定するようなばあいが挙げられる。そうしてみると、いくら個人が自らの必要に応じて各機能システムへの参加を決定するとは言っても、その可能性は無限ではなく、なんらかの事柄によって規定されていることは明らかである。さらに言えば、そうした、ある事柄が自らの接近できる事柄を規定してしまうことがあるということによって、個人間での「格差」が休みなく産出されている。

つまり、あらゆる個人に対して、個人性が獲得されるチャンスが与えられていくと、それぞれの個人において、いかにしてその個人性を実現化できるのかということが問題として浮かび上がってくるのである。機能分化社会における個人には、それ以前の社会と比べて「より多くの選択肢やより多くの選択可能性が存して」いる (Luhmann 1989:159-160) のであるが、どれだけそうした選択肢や可能性に気づくことができ、どれだけそれらに接近できるのかということが、個人の個人性をどれだけ実現化できるのかということにつながっていく。より多くの可能性に気づき、そうした可能性に接近できる者は、ますますその個人性を高めていき、より少ない可能性にしか気づけなかったり、気づいても接近する手段がなかったりする者は、その個人性を十分には現実化できず、両者の格差は明白になっていく。

こうした状況を把握するための視点として、ルーマンは「キャリア」を提示する——「出生、家族における社会化、成層に合致した状況ではもはや生活の通常の進行を期待可能にするには不十分になったので、社会的に必要な不可欠なものとして、キャリアが成立することになる」 (Luhmann 1989:232)。

ここで言われる「キャリア」とは、ルーマンによれば、人生を「自己選択と他者選択を組み合わせた選択的な出来事から選択的な出来事への継起」であると捉えればあいの、「時間モデル」のことを指している (Luhmann 1989:233)。そのさい、出来事のなかには、社会的地位の上昇といった「ポジティブな」出来事だけではなく、社会的地位の下降といった「ネガティブな」出来事も含まれる。さらにまた、キャリアは通常、学歴や職業的地位についての語りにおいて主に用いられる言葉であるが、ここで言われるキャリアは、それよりも広い意味で把握されており、学歴や職業的地位以外に、病気の経験や、犯罪の経験、評判 (それぞれの出来事にさいし、個人が人びとによってどのように評価されたか) など、多数の出来事を含んでいる。

さらに、これがもっとも重要なのであるが、そうしたキャリアは、オートポイエーティックに、キャリアそれ自体を促進する。つまり、前に起こった出来事が次の出来事を、そしてさらに次の出来事を…と、キャリアによって、キャリアそれ自体に組み込まれるであろう出来事が、連鎖的に生み出されていくのである——「キャリアは、それ自体に対してそれ自体でキャリアに組み入れられる過程を与えている、そうした出来事から成り立っている」 (Luhmann 1989:233)。そのことは、まったく新しいことに挑戦するばかりでも同様である。少し長くなるが、キャリアがキャリアそれ自体を促進する例を見よう——「なんらかの職業上の地位を獲得することが新しい職業上の地位を獲得するための前提であったり、所得がクレジットのための前提であったり、著名であることがマスメディアで大いに話題にされるための前提であったり、前科歴が新たな犯罪のための前提であったりするのが、その例である」 (Luhmann 1989:233)。

個人性を実現化する能力は、こうしたキャリアによって方向づけられる。詳しく言えば、これまで蓄積されていたキャリアが、個人が次に接近しうる出来事を縮減しており、そうすることによって、個人性の実現の度合いを増大させたり、減少させたりしているのである。

(4) 個人性とパースン

ところで、このようにしてみると、個人の個人性とは、社会的な諸期待の整序の仕方における他者との差異というだけではなく、個人の社会的なアイデンティティそのものなのだ解釈することができるのではないだろうか。というのも、個人性は、キャリアによって方向づけられるがゆえに、その個人がこれまで関わってきた出来事と、それぞれの出来事にさいしたその個人の社会的な諸期待の整序の仕方とを、「他でもないその個人」に関する事柄として「ひとつにまとめあげる」図式として役立っているように思われるからだ——「個人性という図式は、個人がある状況から別の状況へと移る場合に、個人が同じものにとどまることを保証する」(Pasero2004=2006:202、傍点部分は引用者)。

このように把握された個人の同一性を保証する図式としての個人性は、コミュニケーションにおいては、パースン(Person)として現れることになる——「個人は個人であるだけでなく、パースンにならなければならない」(Luhmann 1989:251、傍点部分は引用者)。

ルーマンによれば、パースンとは「行動諸可能性の個別的に帰属された限定」(Luhmann 1995:148)として定義される——「あるパースンは、そのパースンによって、しかもそのパースンによってしか果たされえない行動諸期待を関連づけ、まとめあげるために考え出されたものにほかならない。……パースンであるために必要なのは、その人の心理システムや身体を手がかりとして、諸期待がその人に関係づけられ、束ね合わされるということである」(Luhmann 1984=1995:585-586)。

相互作用場面において、われわれは日常的に(意識的に、あるいは無意識的に)、「自分がこう言ったら、この人はこういう反応をするだろう」とか、「この人に限っては、こういう場面でも〇〇することはない」とか、「他ではないその人」に限定される期待を抱いている。たとえ相手が初対面の相手でさえそうである。そうした、他者とは異なる「唯一無二の存在」(Luhmann 1982)としての個人に向けられる期待の束こそがパースンであると言えよう。

こうしたパースンを指針とすることで、われわれは、自分以外の多くの他者の中でも、とりわけ、今向き合っている「他ではないその人」に対して、何が期待でき、何が期待できないのかを限定することができるし、同時に、「他ではない自分」に対して何が期待されていて、何が期待されていないのかを限定することができるのである。

ところで、ルーマンは、こうしたパースンを「形式」として捉えている——「パースンは……われわれがそれをもちいて人間的個人のような対象を観察するための新たなる形式なのである」(Luhmann 1995:148、傍点部分は引用者)。パースンが「形式」であるということは、ある側面をパースンとして言い表すばあいはつねに、それ以外のもうひとつの側面が顧慮されているということが含意されている。言い換えれば、ある側面がパースンとして捉えられるということは、その時点においてパースンとしては言い表されなかったもう一方の側面が、潜在的に想定されているということの意味している。ルーマンはこのような「その時点ではパースンとして言い表されていない側面」を「非パースン(Unperson)」と名付けている。非パースンに属する事柄は、積極的には規定されえない。しかし、非パースンは、「パースンに帰属されうるし、場合によってはパースンに対して波及効果を及ぼすことになる」(Luhmann 1995: 149)。

先ほど、「われわれは、パースンを指針とすることで、そのコミュニケーションにおいて

他者に何が期待でき、何が期待できないのかを、あるいは自らに何が期待されていて、何が期待されていないのかを推測することができる」と述べた。しかしながら、われわれは、自らに割り当てられた期待どおりに振舞うことができると同時に、自らに割り当てられた期待に背いて振舞うこともできる。他者もまた同様である。つまり、自分と他者の双方が、いつでも「期待はずれ」に遭う可能性をもっている。

期待はずれは、期待はずれに遭った者に、相手のパースンを更新するよう要請する。なぜなら、そうしなければ、その人は、その後もずっと期待はずれに直面し続ける可能性があるからである。パースン／非パースンという捉え方は、まさに、こうした期待はずれによるパースンの更新の可能性を視野に収めていると言ってよい。言い換えれば、期待はずれが起きた場合に、非パースンを手がかりとして新たなパースンをつくる（＝非パースンをパースン化する）可能性が想定されている。

したがって、パースンという形式の核心は、あるパースンがいつでも別様の期待の束となりうる可能性を有している点に存していると言ってよい——「われわれは、区別の双方の側面を見定めた上で、パースンに忠実なままであるとすることができるし、あるいはパースンの境界を乗り越えていくこともできる」（Luhmann 1995:154）。

パースンという形式は、他者とは異なる唯一無二の存在としての個人に向けられる期待をより適切に、しかも動的に把握することを可能にしている。それゆえ、パースンは、個人性が增大する近代社会においては、「個人」を観察するための必要不可欠な形式として捉えられるであろう。

ここで一度、ここまでの話をまとめよう。

機能分化社会になると、それ以前の社会とは違って、個人は、さまざまな機能システムへと一時的に包摂され続けることをとおして、その生活を成り立たせることになる。そうした社会においては、もはや、それ以前の社会における家族のように、個人に関する事柄を明確に規定するようなシステムは見出されない。したがって、個人に関するあらゆる事柄は、その個人自身へと帰属されていくことになり、個人の個人性が出来る。

さらにまた、家族の意義の減少によって、個人に向けられる社会的な諸期待を整序するものがなくなったので、個人の個人性を方向づけるものとしてキャリアが成立する。キャリアによって方向づけられた個人性は、その個人の同一性を保証する図式として解釈される。そうした同一性は、コミュニケーションにおいてはパースンとして現れる。パースンは、それぞれの個人がそれぞれに個人性を現実化していき、多様な個人が出現する近代社会において、他者とは異なる「唯一無二の存在」としての個人を観察するための、必要不可欠な観察形式である。

3. パースンとジェンダー

(1) パースンの再考

前節では、近代社会におけるパースンの重要性が確認された。しかしながら、パースンがどのようなものを指針として構成されるのかについては、言及してこなかった。そのため、本節はまず、相互行為場面に焦点を当て、パースンがどのようなものを指針として構成されるのかについて考えることから始めたい。

ルーマンは、論文「パースンという形式」の中で、パースンについて、次のように述べ

ている。「興味を持たれ、解明が可能であり、場合によっては疑われもする事柄が『マーク化』によってさらなるコミュニケーションのために際立たせられ、用意されている——まさにそれがパースンなのである。その他の事柄は、マークされない側面に居続ける。なぜなら、それらがコミュニケーションの対象になるということをわれわれは期待しないからである」(Luhmann 1995:148)。

コミュニケーション・システムは、自らで自らの要素であるコミュニケーションを産出し、次のコミュニケーションへと接続していくことで、システムを維持しているのであるが、そのさい、何らかの指針がなければ、次のコミュニケーションをつくりだしたり、次のコミュニケーションへ接続したりすることはできない。「マーク化」される事柄とは、そうした、コミュニケーションの指針となりうる事柄である。言い換えれば、コミュニケーションによって役立てられる可能性のある、あらゆる事柄と言ってもよいだろう。したがって、パースンが個別的に限定された期待の束であることと考えあわせれば、パースンとは、特定の個人にかかわり、かつ、コミュニケーションの「対象」となりうる可能性をもった、あらゆる事柄によって構成されると考えられる。

具体的に言えば、年齢や性別、体格、服装、声質や声の大きさ、話し方、振る舞い方、性格や資質、行動パターンや思考パターン、その人が好きなことや嫌いなこと、得意なことや苦手なこと、趣味、家族構成、職業、学歴や経歴などが挙げられるであろう。それらのさまざまな事柄は、われわれが他者と関わり合うさいに（もちろん全部ではないにしろ）興味をもって確かめる事柄であり、知ることのできる事柄であり、場合によっては他者によって（あるいは自らによって）なされた申告が本当かどうかを疑うことができる事柄である。

パースンを構成する指針となりうるこうしたさまざまな事柄は、相互作用による知覚という視点を導入すると、大きく分けて2つに分類することができるように思う。すなわち、知覚によって知ることのできる事柄と、それ以外の事柄である。ここで言われる「知覚によって知ることのできる事柄」とは、おおよその年齢や性別、体格、服装、声など、「一目見ただけでわかる」事柄のことを指している。それ以外の事柄とは、性格や資質、行動パターンや思考パターン、好き嫌いや得手不得手、家族構成や経歴など、一見しただけではわからないような事柄を指している。

そこでさらに考えてみると、初めて会う相手のパースンは、主に、知覚に頼って構成されると解釈することができる。というのも、初めて会う相手の個人的な事柄について、われわれはほとんど何も知らないからである。一方、その相手と関わり合っていくなかで、われわれは、相手の個人的な事柄について知る機会を得る。それにともない、相手のパースンは、知覚以外の事柄を主軸として構成されることが多くなると考えられる。

(2) 知覚、性別、パースン

1 節において述べたように、本稿の一貫した問題関心は、近代社会における個人と性別との関連性を明らかにすることにある。性別は、前項において提示した、パースンを構成する指針となり得るさまざまな事柄のうち、当然ながら、「知覚によって知ることのできる事柄」として分類される。したがって、ここでは、性別の知覚がいかにしてパースンを構成していくのかを明らかにしたい。

われわれは通常、多くのものごとを同時に知覚しており、知覚されたものごとを、何らかの認知モデルにあてはめて解釈している。

当然のことながら、そうしたモデルは、各人にはじめから備わっていたものではなく、いわば学習の結果としてもたらされたものである。そうした学習は、その人の日常的な経験の積み重ねや、当該社会に共有された文化と関わりながら行われている。つまり、われわれが何かを知覚するさいに用いている認知モデルは「決して無作為だったり恣意的だったりするわけではなく、むしろ社会的に共有された期待に沿って産出されている」(Pasero 2003:111、傍点部分は引用者)のである。

そのようにして獲得された認知モデルは、知覚されたものごとをフィルターにかけ、必要な事柄とそうでない事柄を、あるいは重要な事柄とそうでない事柄を、選別したり、分類したりしている。しかも、そうした認知モデルは、それが獲得されるまでの過程が忘れ去られることによって、いわば「反射的に」用いることができ、意識がさまざまな状況に適応できるよう、用意されている。

ステレオタイプは、そうした認知モデルのなかでも傑出して、知覚されたものごとを簡略化するのに適している。詳しく言えば、ステレオタイプは、知覚されたものをすでに用意された鑄型へと嵌め込むことによって、知覚された複雑で大量な事柄を、一度に、かつ大量に処理することができるのである。

とりわけ性別ステレオタイプは、意識によってもっとも「呼び出され」やすい認知モデルのひとつである。なぜなら、性別ステレオタイプは、あらゆる人びとを男／女というたった2つのカテゴリーによって把握できるからであり、つまりは、諸ステレオタイプの中でも、もっとも単純にかたちづくられているからである。さらにまた、性別ステレオタイプは、われわれの「肉体的な現存」(Pasero 2003:113)と結びついているがゆえに、つまりは、外見において瞬時に見て取ることができるしるし(体格・声・服装・化粧の有無・立ち居振る舞いなど)と結びついているがゆえに、対面状況においてはとくにその効力を発揮しやすい——「まさに対面状況においては、それら [=身体や声や服装] の関与は避けられない。というのも、それらは外見において現れるためにそうなのであり、可視的なものであるためにそうなのであり、さらには、コミュニケーションにおいて否定されえない何かであり、かつ識別できるような何かであるために、そうなのである」(Pasero 2003:113、[]内は引用者)。それゆえ、対面状況においては、往々にして、他者を性別ステレオタイプによって把握するという事態が起こりうる。

ただし、ここで注意しなければならないのは、ステレオタイプとは認知モデルの一種なのであって、認知モデルは、それ単独では決して、他者への期待を形成しないということである——「性別ステレオタイプは決してステレオタイプの期待モデルではなく、それに対置される別物なのである」(Pasero 2003:112)。性別ステレオタイプという認知モデルによって他者を知覚するということは、その他者が「男であって女ではない」と、あるいは「女であって男ではない」と判断する以上のことを意味しない。他者の性別を判断したさいに付随する「男であればこう振舞うべきだ」とか「女であればこうあるべきだ」という期待は、ステレオタイプそのものではなく、性別役割期待なのである。つまり、ステレオタイプは、特有の役割レパートリーと結びつくことで——性別ステレオタイプなら、性別役割と結びつくことで——初めて、他者への期待を構成するのである。

したがって、性別の知覚は、それ自体が直接的にパーソンを構成するわけではなく、知覚されたものを解釈するための認知モデルの一種である性別ステレオタイプが、性別役割と結びつくことによって、間接的にパーソンを構成するとみてよい。

ただし、厳密に言えば、役割期待それ自体は、パーソンではない。しかし、役割期待の付与はパーソンを構成する契機となりうる。つまり、「パーソンと役割の差異ということを考えてみて初めて、役割の履行が『パーソナルなスタイル』をおびるということや、逆に、パーソンがその役割をとおして形成されるということ……がみてとれるのである」

(Luhmann 1984=1995:588) というルーマンの言葉を踏まえれば、役割期待を受容するのか拒否するのか、受容するとしたらどのように遂行するのか、受容した役割はどのようにその個人のパーソナリティに影響を与えるのか、といった点において、役割はパーソンと容易に接続しうる。

(3) 機能分化社会における性別とパーソン

ここまでの話を一度整理しよう。本節1項では、パーソンが個人に関するあらゆる事柄によって構成されることを確認するとともに、そうした個人に関するあらゆる事柄は、相互知覚という視点を導入することで、「知覚によって知ることのできる事柄」と、「それ以外の事柄」の2種類に大別できることが示された。そして、初めて出会う他者のパーソンを構成するばあいには、知覚によって知ることのできる事柄がとくに重要になることが示された。2項においては、そうした「知覚によって知ることのできる事柄」の中でも、とくに、性別がいかんしてパーソンを構成していくのか、その過程を考察した。そこで明らかになったのは、性別の知覚は、知覚されたものを解釈するための認知モデルの一種である性別ステレオタイプと、それと結びつけられた性別役割を経由して、間接的にパーソンを構成するということである。

そうしてみると、われわれは多くのばあい(他者の個別的な事柄について何も知らない、初対面のばあいにはとくに)、他者と出会ったときにはすでに、他者の性別を知覚することによってもたらされた性別役割期待をもとに、他者のパーソンの一部を構成していると言える。言い換えれば、性別ステレオタイプと性別役割が結びついてしまっている状況では、性別の知覚は、つねに、他者を「唯一の性別」をもったパーソンとして構成する可能性を内包している。

こうした状況は、今後、変化するのだろうか。私見では、個人の個人化が進展する近代社会において、性別は、一方においてはその重要性を増大させ、他方においてはその重要性を減少させるという、まったく相反する2つの可能性を有しているように思われる。

一方において「性別が今後重要性を増す」と言ったのは、次のような理由による。すなわち、前節において述べたように、近代社会では、前近代社会における家族のように、個人の性質を一元的に規定するようなシステムは存在しない。したがって、繰り返し述べてきたように、「一目でわかる」ような特徴以外、初めて出会うその人について知りえる情報はほとんどないのである。そうした状況において、性別ステレオタイプは、「一目でわかる」うえに、(現段階では)さまざまな役割期待が付随しており、もっともコミュニケーションに役立てられやすい特性を備えている。したがって、今後、個人を規定するものが今以上に減っていけば(そしてそれと同時に、性別ステレオタイプが性別役割期待から解放された

れないままではあるならば)、それにともない、性別はますます重要性を増してくる可能性があると考えられる。

他方において「性別が今後重要性を失っていく」と言ったのは、次のような理由による。すなわち、それでもやはり、社会は個人がより個人化する方向へ進んでおり、性別がその人の何かを規定するようなことは減っているのである。つまり、すでに既存の性別役割期待に則したコミュニケーションは、期待はずれに出会うことが増えている。それゆえ、たとえ最初に出会ったそのときには、性別を指針としたコミュニケーションが行われるとしても、その後は他者の個人的な事柄を知るにともない、適宜、他者のパースンを更新していくことが求められることになる。とくに、自らと他者が親密になればなるほど、他者のパースンは、「知覚によって知ることのできる事柄」以外の事柄を主軸として構成されることが見込まれる。さらにまた、ルーマンが『情熱としての愛』のなかで指摘しているように、自らと他者の関係が親密になればなるほど、より個人的な事柄に焦点を当てたコミュニケーションが自らと他者の双方によって望まれるようになることは疑いようがない(Luhmann 1982)。

4. おわりに

本稿では、相互知覚という視点を取り入れることで、近代社会における個人のパースンと性別との関連について考察した。そこから導き出されたのは、性別が今後、ますます重要性を増していくと同時に、ますます重要性を失っていくという、相反する2つの可能性である。

こうした2つの可能性のもとで、いずれの可能性をより推し進めていくのかは、社会の手に委ねられていると同時に、近代社会を生きるわれわれひとりひとりの手に委ねられていると言ってよい。

つまり、パースンは、確かに「興味を持たれ、解明が可能であり、場合によっては疑われもする事柄が『マーク化』によってさらなるコミュニケーションのために際立たせられ、用意され」たものなのであるが、用意されたものをどのように利用するのかは、コミュニケーションに、ひいてはコミュニケーションに関与する個々に任せられていると言ってよい。したがって、われわれは、個人に関するさまざまな期待をまとめあげたパースンのなかから、性別役割期待を取り出してコミュニケーションに役立てることもできるが、それと同じように、性別役割期待以外の期待を取り出してコミュニケーションに役立てることもできる。さらに、前述したとおり、われわれが他者と関わり合い、他者の個人的な事柄について知ること、他者のパースンは他者のより個人的な事柄を主軸として構成されるようになってくる。つまり、他者に関する個人的な事柄を知れば知るほど、コミュニケーションに役立てることのできる「しるし」は増えていくのであり、コミュニケーションに役立てることのできる性別以外の「しるし」が増えていくのである。

さらに言えば、パースンは形式であるがゆえに、もう一方の側面として「非パースン」を用意している。このことが意味しているのは、一度、あるパースンとして構成されたとしても、そのパースンはいつでも変わりうる可能性をもっているということである。ルーマンが言うように「われわれは、区別の双方の側面を見定めた上で、パースンに忠実なままであろうとすることができるし、あるいはパースンの境界を乗り越えていくこともでき

る」(Luhmann 1995:154)。つまり、われわれは、われわれの性別をもとにして割り当てられた期待に、忠実であることはもちろん、背くこともできるのである。そうしたパースンへの違背は、他者に自らのパースンの更新を要求することになる。誤解を恐れずに言えば、そうした出来事が「社会のキャリア」として積み重なることで、「一目でわかる」にもかかわらず、性別がそれほど重要性をもたない社会へと変わっていく可能性が見出される。

このようにしてルーマンの社会システム理論にもとづき、近代社会と個人の関係のありようから、性別と結びつけられた期待についてしてみると、個人化が進展する近代社会であるからこそ、性別がいっそう重要性を増すという傾向が見られると同時に、実は、われわれはすでに、性別という呪縛から解放され、性別と結びつけられた期待を「攪乱する」(Butler 1990)契機を十分に有しているということが明確になる。今後は、こうした状況をふまえた上で、ひとりひとりがどのように振る舞うのか——つまり、性別という「しるし」を選び取らずに他者と関わり合っていくのか、それとも、それでもやはり性別という「しるし」を選び取りながら他者と関わり合っていくのか、あるいは、性別と関わる期待を自覚的に整序することでパースンの更新をせまるのか、それとも、無自覚に受け容れることで現存する性別期待を維持させていくのか——が問題となるのではないだろうか。

<文献>

- Butler, Judith, 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge (=竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社)
- Luhmann, Niklas, 1982, *Liebe als Passion: Zur Codierung von Intimität*, Suhrkamp. (=佐藤勉・村中知子訳, 2005, 『情熱としての愛 親密さのコード化』 木鐸社)
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme. Grundriss einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp. (=佐藤勉監訳, 上: 1993, 下: 1995, 『社会システム理論』 恒星社厚生閣)
- Luhmann, Niklas, 1989, "Individuum, Individualität, Individualismus", in: *Gesellschaftsstruktur und Semantik* Bd.3, 149-258.
- Luhmann, Niklas, 1995 (1991), Die Form "Person", neuedruckt in: *Soziologische Aufklärung* Bd.6: Die Soziologie und der Mensch, Opladen: Westdeutscher, 142-154.
- 松本真一, 2004, 「ルーマン理論における社会と個人の問題をめぐって」, 『現代行動科学会誌』 第20号 pp.1-7.
- Pasero, Ursula, 2003, "Gender, Individualität, Diversity", in: Pasero, Ursula und Weinbach, Christine (Hg.), *Frauen, Männer, Gender Trouble*, Suhrkamp, 105-124.
- Pasero, Ursula, 2004, "Frauen und Männer im Fadenkreuz von Habitus und funktionaler Differenzierung", in: Nassehi, Armin und Nollmann, Gerd (Hg.), *Bourdieu und Luhmann. Ein Theorievergleich*. Suhrkamp, 57-84. (=森川剛光訳, 2006, 『ブルデューとルーマン—理論比較の試み』 新泉社, 190-205 ページ)
- 佐藤勉, 2004, 「ルーマン理論における排除個人性の問題」, 『淑徳大学社会学部研究紀要』 第38号 pp.63-77.
- Weinbach, Christine, 2004, *Systemtheorie und Gender. Das Geschlecht im Netz der System*, VS Verlag.